

それでも生き続ける

(ピリピ・二一―二六)

父である王の急死に直面したとある青年がいた。だが死を悼む十分な暇もなく、彼の母は叔父と結婚し、その国の王位を継ぐことになった。そんな中、城内に王の亡霊が出るという噂が彼の耳に届く。父の死、そして母の再婚に沈む王子はその噂を確かめようとする。噂は本当だった。父の亡霊はこう言った。「俺はお前の叔父に毒殺された」と。そして父母を奪った叔父に対する憎しみと復讐に燃えて彼は言うのであった。「生きるべきか死ぬべきか。それが問題だ」ご存知『ハムレット』の名場面である。

閑話休題。今朝の個所におけるパウロもまた「生きるべきか、死ぬべきか」の瀬戸際にいたのだがパウロの悩みはハムレットのそれとは異なる。ハムレットが死を望まないのは「死後の世界の事は誰にもわからぬ」からなのだが、パウロは「死ぬことは益だ」と断言しているのだから。ではなぜ彼はジレンマを感じたのだろうか。またどちらを選んだのだろうか。更にその選択の理由や目的はどこにあったのだろうか。

一、願わしく、慕わしい「死」

パウロは大胆にも自分にとって死ぬことは益だと主張している。しかし死ぬことが益とは一体どういう意味なのだろうか。先ずこの個所にはキリスト教でよく言われる「古い自分の死」や「自我の磔殺」という神学的な意味は全くないということを感じねばならない。寧ろここは字義的に解すべきである。パウロは自分の肉体的な死をポジティブに見ていたのだ。理由はと言えば彼にとって死ぬことは即ちキリストと共にいることになるからである。またここでパウロが「死」を「世を去る」と言い換えていることにも注目したい。この言葉は比喩的であり、軍隊が野営を撤収することを指すのにも用いられていたという。これはコリント五・一―一一においてパウロが地上でのからだを幕屋に例えていることを彷彿させる。パウロにとってこの世の生は幕屋の如き暫定的なものであり、むしろその先にある天の住まいこそが「建物」であり「家」なのである。そう考えると、死の意味は通常私たちが考えるのとは異なっている。パウロにとっての死、それは希望への扉なのだ。死にさえすれば迫害、嫉妬、誤解、苦勞から解放され永遠にキリストと共に居られる。そう考えると囚われの身であったパウロが死を願ったのは十分に理解できることとなる。

二、必要とされる「生」

このようにパウロは死の益を語り、死を自らにとって願わしいものとして語った。しかし彼は決して安易な自殺志願者ではなかった。というのも彼にとって生き続けることはキリストでもあったからである。だが自身に対して敵愾心を燃やし、それを動力にして伝道するものたちの報告を聞きながら、獄中で明日のいのちも解らない日々を過ごすことは容易なことではない。しかし彼は死の魅力を感じながらも生き続けたのだ。その根拠と目的はどこにあるのだろうか。

まず根拠であるがそれはキリストである。ガラテヤ二・二〇にあるようにパウロの生は即ちキリストの生である。だとすれば彼が生きる限り、そこにキリストの証しが立てられる。たとえ不器用に見えても、人から理解されなくてもキリストが息づいているような生をパウロは求めたのだ。つぎに彼が生き続けた目的であるが、それはピリピ教会の成長と発展のためであった。(二四節) 人間というものは基本的に自分がかわいいなものだ。だから自分の願いを叶えようと人や社会に働きかけて生きていく。だがパウロは違う。キリストの命で生きた愛すべき使徒は、キリストのゆえに、そして信徒の成長と進歩と喜びがまし加わるために、あらゆる苦しみ恥を厭

わず生き続けることを選んだのだ。死んで楽になるのではなく、労苦と恥辱を引き受け、キリストの喜びだけでなくその苦難をも受け取ることを選んだのである。キリストの名を大きくするために。

* * *

「生きる 生きる 泥水を飲んで
んなにつらくても生き続けよう。明日
明日もし生きてれば もう一度朝日を見
られる。妙に暑苦しく、昭和の香りが漂
うこの歌、歌うのはあのAKB48(！)
である。今や国内だけでもAKB、SKE、
MNB、HKTとあるのだから競争
は熾烈を極める。移籍や降格(?)を体
験しながらなお挑戦し続ける彼女たちの
「本気」が込められているようにも見える。
だがAKBの「生き続ける」とパウロの
「生き続ける」を比べてみると、やはりそ
こには違いがある。それは彼女らが生き続
けるのは主に自己の実現のためであるの
に対し、パウロのそれはあくまで自分の願
いを離れたところにあったということであ
る。自分の願いを越え、与えられた使命
のためにいのちを燃やし、生き続ける。こ
れはイエス・キリストのうちにも見られた
姿勢である。主のゆえに、人のために、
死の先にある希望見据え、喜んで生き続
ける。これをキリスト者の生というのだ。